

## 第1回 知的生産性研究委員会 議事要旨

1. **日時**：平成19年8月24日（金）13:30～15:30
2. **場所**：中央合同庁舎3号館 11階特別会議室
3. **出席者**：村上委員長、川瀬幹事、杉浦副幹事、柳井副幹事  
伊香賀委員、坂部委員、妹尾委員、田辺委員、坊垣委員、高井委員、可児委員、  
佐藤委員、柳原委員、市川委員、山下委員、宗本委員、森川委員、野沢委員、  
平倉委員、廣岡委員、中村委員、池田委員、恵良委員、沖野委員、  
坂本委員、水流委員、田中委員、土居委員（順不同）  
和泉住宅局長  
事務局：国土交通省住宅局住宅生産課、（財）建築環境・省エネルギー機構
4. **議事**：（1）建築における新たな課題－知識社会と知的生産性  
（2）部会の設置と各部会の活動方針について  
（3）フリーディスカッション  
（4）今後の進め方について
5. **議事概要**：
  - ・ 議事に先立ち、和泉国土交通省住宅局長よりあいさつがあり、本研究委員会の設置趣旨の説明が行われた。

**（1）建築における新たな課題－知識社会と知的生産性について（資料5-1、5-2、6）**

  - ・ 村上委員長より、本委員会の趣旨について次の説明があった。
  - ・ 知識社会の進展、近年の労働形態の変化とナレッジ・エコノミーの進展の下で経済競争力を向上させることの重要性が、本研究の背景にある。
  - ・ 大量生産・大量消費型社会から「脱物質化」という新しいキーワードが必要。「脱物質化」を支えるものは「知識」という新しい価値観。
  - ・ ナレッジ・ワーカーの知的生産性を高める建築空間や環境をどのように提供することができるか、その研究が現在強く求められている。
  - ・ 本研究委員会の下に、以下に示す4部会を中心に検討を進めていく旨、説明がなされた。また、各部会の部会長について、以下の通り委員長より指名がなされた。
    1. 環境・設備 生理／心理部会（部会長：田辺委員）
    2. 環境・設備 計画／評価部会（部会長：川瀬幹事）
    3. 建築空間 計画／設計部会（部会長：宗本委員）
    4. 経済性と評価／格付部会（部会長：伊香賀委員）

**（2）部会の設置と各部会の活動方針について（資料7-1～7-4）**

  - ・ 田辺部会長より、環境・設備 生理／心理部会では、室内の空気、温熱、光環境などの物理環境が知的生産性に及ぼす影響を、心理的・生理的な側面から評価する手法を検討する

こととし、既存の学術データの整理、客観的事例の調査とそのデータベース化などを行う旨、説明が行われた。

- ・ 川瀬部会長より、環境・設備 計画／心理部会では、主観的な側面から設備計画や環境が知的生産性に及ぼす影響を検討することとし、国内外の文献・先進事例の調査や、知的生産性を調査するためのアンケート等を通じて、知的生産性を向上させる環境・設備のモデル、技術マップ等を提案する旨、説明が行われた。
- ・ 宗本部会長より、建築空間 計画／設計部会では、多様なワークスタイルに配慮しながら、知的生産性を向上させるワークプレイス（仕事場）の具体的な計画提案を検討することとし、文献調査・先進事例の調査や、生理／心理部会や計画／評価部会の成果を参照し、各種計画手法の提案等を行う旨、説明が行われた。
- ・ 伊香賀部会長より、経済性と評価／格付け部会では、知的生産性向上に資する建築空間や環境について、それを経済性の評価や、CASBEE 等の総合的な環境性能の評価、格付け手法につなげるための方法について検討する旨、説明が行われた。

### (3) フリーディスカッション【主な意見】

- ・ 生産性を具体的な数字で表示するには、それがどの程度信憑性を持った数字であるのか、ということが重要になる。それが可能ならば建築を計画する側にとって大きな説得力になってくれる。
- ・ 部会毎に作業されるようだが、個人の知的生産性と組織総体の知的生産性の関係を考えるのであれば、職種や業種などを絞り込んでおいた方がよい。知識立国を目指していくときに高い付加価値を生み出すナレッジ・ワーカーや業種などに的を絞るとよい。
- ・ 例えば研究所などの建築の設計においては、研究者のひらめきや創発性をどのように高めるかといったことが重視される。
- ・ 最近ではオフィスで働く人たちのワークスタイルが多様化してきている。コミュニケーションの場を重視する例や、託児所を設置する例など、様々な価値観があり、働きやすいと感じる環境も様々である。
- ・ 個々人はそれぞれ自分の快適性の基準を持っており、個人がどう制御できるかという可変性を考えることも重要である。
- ・ 公共の場における生産性の向上も考える必要があり、この場合の生産性という言葉の意味合いを考える必要がある。

### (4) 今後の進め方について（資料 8）

- ・ 本研究は、本年度を含め 3 カ年計画で進める。
- ・ 今後は各部会で具体的な検討・議論を進め、本年度末に委員会を開催する。部会の検討状況に応じて年内に委員会を別途開催する場合もある。
- ・ 本年度内に研究の方向性を決定し、21 年度末までに具体的な成果を得ることとする。
- ・ 来年 1 月 28 日にシンポジウムを開催し、この分野での研究状況を紹介する予定。

以上